

挫折

守永英子

“挫折”的感じは、私自身の生活に身近なものと思っていた。しかし改めて考えてみると、これが私の挫折の経験であるといえるような大きな事柄は思い当らない。ただ、二十数年の保育の経験の中に、”保育とは”あるいは”子どもとは”ままにならないものであるという感触があつて、この感じの裏づけになつてゐるもののが、数多の挫折の経験ではないかと思われる。

就職して二か月後のこと、当園で実際指導研究会というものがあつた。卒業式の日、ひとりの子どもの登園の遅さを気にしつつ、卒業式の時間に追られを出すということであった。当時は、三歳児を生れ月で二学級に分けていて、私の担当は、生れ月のおそい、より幼い子どもたちである。私は、先輩の先生方から助言をいただき、担当の時間内での指導の運びを綿密に考えた。ところが、当日、子どもたちは直に飽きて、いざ引っくり返すなどの大騒ぎを演じ、私の計画は水泡に帰したのである。これ

るかもしれない。かなり腕白な子どもたちだったとはいへ、今にして思えば、私の気持は、ひたすら課題に向つており、子ども不在の案だったようである。このことで深く傷ついた記憶がないのは、周囲の先生方のいたわりと、園長先生のおらかさのおかげだと思う。

それから数年後に受け持つたクラスの卒業式の日、ひとりの子どもの登園の遅さを気にしつつ、卒業式の時間に追られて、子どもたちを並ばせ始めた。そこで、やっと登園してきた子どもに、「お手洗に行っていらっしゃい」と声をかけた。彼は黙って、並んでいる列に加わった。式の間に行きたくなりはしないだろうか、そういう心配にとらわれて、私はもう一度声をかけた。「待っていてあげるから、心配しないで行っていらっしゃい。式の間は行かれないのであるから」彼は黙つて動かなかつた。卒業の時になつて、こ

のようなささいなことがスムーズに行かないなどとは、思つてもみないことだつた。私は、焦燥を感じながら、行き詰つた氣持で彼を見つめたが、相手は貞のように押し黙つたまま、がんとして動こうともしなかつた。こうして、氣持が行き違つたまま、彼は卒業して行つた。その時の重い氣持を、私はすつと忘れることができなかつた。中学に進んだ時のクラブ会で、久しぶりに会つた彼に、その時のこと、「覚えてる?」と聞くと、「覚えていません」と笑つてゐた。六年間で、やつと重荷を降ろしたような氣持であつた。

私の挫折感をよそに、子どもたちは、すくすく育つていくようである。それは、子どもたちの健康さゆえであろうか。六月のうつとうしさも、夏の太陽の輝きの中では忘れてしまふように、健康さが、ささいな出来事を消してしまふのだろうか。出来事が消えても、その時の「思い」は、心の底に沈んで、いつまでも残るのだろうか。

その前後も、たびたび挫折感を味わつたような気がするが、一つひとつ鮮明に思い出すことができない。恐らく、それは一つの経験の終結としてではなく、過程の一こまとして、連続したものの中に含まれてしまつてゐるからではないかと思う。

そして、二十数年経つた今、見通しも、一つの視点から直線的にとらえられたものでなく、幅を持ち、いろいろな情況に対応できる柔軟なものに、多少ともなつてきたと思う。

ある人に、「先生の得意な分野は?」と聞かれたことがある。問われて気づいたが、私には特技と云える分野がない。幼児教育は「幼児教育」であつて、分割して考えたことはあまりなかつた。ただ、挫折感を節に織り続けた、地味な、平凡な、保育者生活である。願わくは、しかし、自分に思いをいたすならば、それは、見通しのつたなさであり、読みのよくな、深い味わいに織り上げられれば浅さであらう。いっそ、見通しを持たなければ、挫折感はないであらうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)